食の考古学 1

縄文時代の食
—上里遺跡の調査から—

http://www.kyoto-arc.or.jp
（公財）京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館

はじめに　2013 年 12 月 4 日、「和食；日本人の伝統的な食文化」がユネスコ（国際連合教育科学文化機関）の無形文化遺産に登録されました。京都には、豊かな自然と長い歴史の中で伝承・洗練された和食文化の伝統が現代にも息づいています。

京都市考古資料館では、発掘調査成果から明らかになってきた、縄文時代から江戸時代の食文化を、企画陳列として、2014 年 6 月より断続的に 6 回に分けて紹介してきました。2017 年 11 月から「江戸時代の食」を実施、最終回を迎えたことから、順次リーフレット京都でも紹介していきます。

上里遺跡の調査　上里遺跡は、京都市西京区大原野にある縄文時代から中世に至る複合遺跡です。道路新設工事に先立つ発掘調査のうちの 2006 ～ 2009 年度調査において、縄文時代晩期（約 2,800 年前）の集落跡がみつかりました。集落跡は、北から南へ流れる小畑川西側の緩やかな斜面に占地しており、竪穴住居や土壙墓（穴を掘って遺体を埋葬する墓）・土器棺墓、流路状遺構などがみつかっています。

流路状遺構は、蛇行した川跡がくぼみとなった自然地形で、深い部分では湧水があり、水場として利用される一方、食物残滓（食べかす）の捨て場としても使われたようです。流路状遺構を埋めた土には食物残滓がたくさん含まれていました。これらから、縄文時代の食について考えてみたいと思います。

上里遺跡　2009 年度調査区全景（東から）南から回り込むくぼみが流路状遺構

流路状遺構の食物残滓　流路状遺構の土を水で洗い、ふるいに掛けて選り分けると、食物残滓と考えられる細かい植物遺存体や動物遺存体がたくさん見つかりました。

植物遺存体には炭化したものと炭化していないものがありました。炭化したものには、穀類であるマメ類（ササゲ属）、ドングリ・クリ・オニグルミ・トチノキなどの

上里遺跡から出土した動・植物遺存体

堅果類、サンショウ・オオムギなどの種子類があります。炭化していないものには、キイチゴ、カジノキ、ニワトコ、マタタビ、ヤマグワなどの種子があり、その実が食用になるものが多くありました。出土したマメ類は、野生種よりも大粒で大きさがそろっており、栽培が行なわれていたものと考えられます。ドングリなどの堅果類が炭水化物食糧であるのに対して、マメ類はタンパク質を多く含む食糧であることから、重宝されたことでしょう。

また、調査で出土した石皿、擦石（すりいし）を微細に調べたところ、デンプンが残存していることがわかりました。これらの石皿と擦石で穀類や堅果類を擦りつぶしていたのでしょう。

動物遺存体は、いずれも高熱を受けており、変形・変色がみられる骨などです。イノシシ・シカなどの大型哺乳類、ノウサギ・ムササビなどの小型哺乳類、カエルなどの両生類、カモ・キジなどの鳥類、コイ・フナ・ナマズなどの魚類の骨があり、身近な動物を食用として捕まえていたことがわかります。魚類の骨には少量ですが、タイの骨もあり、交易などによって海の幸を入手していたこともわかりました。

縄文時代の食　上里遺跡では、流路状遺構の土の分析を行なうことで、食物残滓がみつかり、当時どのようなものを食べていたかを考えることができました。ただし、当時の食物すべてがわかるわけではありません。2,800年間という長い年月の間に失われてしまったものも多くあるに違いありません。たまたま、残存していたものばかりですが、当時の食べ物の一端を示しています。

青森県の三内丸山遺跡（縄文時代前期～中期、約5,500～4,000年前）の調査では、すでにヒョウタン、ゴボウ、マメなどの栽培が行なわれていたことや、人が住み始めると急激にナラやブナの森がクルミやクリの林に変わったことが花粉分析の結果などで知られています。このことから、樹種を選別し、管理する栽培が行なわれていたと考えられています。

縄文時代晩期における上里遺跡の人たちも、食料の確保には努力した様子がうかがえます。

（高橋　潔）